

「実践演習」の効果の検討（1） 実践演習履修と学生の機会活用スキルの変化

Measuring the effectiveness of "Service Learning": Developing career skills by registering for "Service learning in the community" and "Theme-based research project" courses.

高木 邦子

文化政策学部 国際文化学科

Kuniko TAKAGI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本論は、平成27年度から本学に新設された「実践演習」の教育効果検証を目的とした縦断調査の報告である。キャリア構築の機会活用スキル（6 Skills for Careers : 6SC）の得点変化量について、地域連携実践演習の受講有無（2）×テーマリサーチプロジェクトの受講有無（2）の2要因分散分析を実施した結果、地域連携実践演習を受講した学生の「人間関係スキル」が低下することが示された。地域連携実践演習は、社会と触れることで学生が自身の不足を実感する機会を提供しており、結果として学生の機会活用スキルに対する自信が低下したと考えられる。そのほか、チャレンジしてみようという意欲をもって地域連携実践演習を受講した学生はスキル得点が高まり、友人に誘われて受講した学生は低くなった。単位の為にエントリーした学生のスキルは増加することも示され、ジェネリックスキルの育成に繋げるきっかけを提供するという「実践演習」科目の目的が果たされているとの結果が示された。なお、テーマリサーチプロジェクトの履修は学生のスキル変化には有意な影響は示されなかった。

This paper reports on a longitudinal study that confirms the educational effects of a class grouping called "Service Learning," which includes subjects entitled "Service learning in the community" and "Theme-based research project."

A two-way ANOVA was conducted on whether registering for "Service Learning in the Community" (2) and for "Theme-based research project" (2) would affect student scores on the 6 Skills for Careers (6SC) measure. The results showed that in general, those who registered for the "Service learning in the community" course significantly decreased in "personal relationship skills," indicating that they had lost confidence after facing difficult issues through the experience of public participation.

However, the motivation for registering for these courses exerted an influence on 6SC scores. Students who registered for "Service Learning" as a personal challenge showed an increase on some measures of the 6SC, while those who registered because their friends invited them showed a decrease in some skills. It was also noteworthy that students who registered in order to earn course credit showed an increase in some skills. Overall, the goal of developing generic career skills by having students face difficult issues through their participation in "Service Learning" was achieved through "Service learning in the community." However, participation in the "Theme-based research project" had no significant effect on an increase or decrease of skills.

1. はじめに

1.1. 本学「実践演習」の位置づけ

近年の大学教育には、学生に“社会で必要な力”を育成することが求められている。それらの能力の総称“ジェネリックスキル”の育成に向けた大学教育の動きには、教育目標を達成するツールとしてジェネリックスキルを活用した（アクティブ・ラーニングなどの）授業運営、ジェネリックスキルの向上それ自体を教育目標とした授業実践、課程外の活動やボランティア活動など、ジェネリックスキルの獲得が期待される機会の提供、などが挙げられよう。本学で平成27年度から新設された科目群「実践演習」は、学生に対して学外の世界に目を向けたり活動にかかわったりする機会を提供することで、ジェネリックスキルの獲得・向上を期待したものである。すなわちこの科目群は、ジェネリックスキルの向上を意図した側面と、大学外・授業外での活動機会の提供という側面をもつ科目と位置付けられる。

学生は卒業要件として、この科目群から1単位以上の履修が必要である。実践演習に含まれる科目には、（1）地域の課題、社会的な課題、日常的な課題、先端的な課題等に対して実践的な企画・立案・プレゼンテーションを集中講義の演習で学ぶ「テーマリサーチプロジェクト」、（2）

行政、企業、学校、NPO等の現場での体験を通して、現実社会と関わりながら地域課題への理解を深める「地域連携実践演習」、（3）そして2年次以降に履修可能であり、地域連携促進、多文化共生、文化・芸術振興支援及びユニバーサルデザイン等の広範な領域においてリサーチを踏まえて現場で主体的に実践し提案する「テーマ実践演習」、という各1単位の3科目がある。「地域連携実践演習」と「テーマ実践演習」は学外での実践的活動が中心であり、既存のプログラムに参加する「地域連携実践演習」に対して、学生が自発的にテーマを定めて地域貢献の企画を運営する「テーマ実践演習」はより主体的な活動が期待される点が異なる。「テーマリサーチプロジェクト」は集中講義形式であり、大学での演習が活動の中心である。各科目は「A」「B」として2度ずつ履修が可能であり、テーマの一貫性は必ずしも問わないため、同じ活動に継続して関わることも、異なる活動に参画することもできる。このうち本研究は、1年次に開講される「地域連携実践演習」と「テーマリサーチプロジェクト」に焦点を当てたものである。

1.2. キャリア獲得の機会活用スキルへの注目

高木（2016）は、学生のジェネリックスキル獲得に必要な資質としてキャリア構築のためのスキルに注目

している。Mitchell, Levin, & Krumboltz, (1999) は、キャリア発達が目標を定めて直線的に進むものではなく、様々な変化が生じる人生において、その時その時の状況に応じてキャリアを構築していくというPlanned Happenstance 理論を提唱した。そして、キャリア構築に有効なスキルとして(1) Curiosity (好奇心)、(2) Persistence (持続性)、(3) Flexibility (柔軟性)、(4) Optimism (楽観性)、(5) Risk Taking (冒険心)を挙げている。これらのスキルは人生の変化の中で遭遇する様々な出来事の中で、キャリア構築につながりそうなチャンスを確認する、またはそうしたチャンスを作り出し、活かす、といった形でキャリア構築に貢献するものとされる。

このMitchellらの概念を参考に、高綱・浦上・杉本・矢崎(2014)は、日本の青年を対象としてキャリア獲得の機会活用スキル(以下『機会活用スキル』)を測定する尺度、6SC(6 Skills scale for Career)を作成した。6SCは「キャリア形成につながるかもしれない機会を認識したり、そのような機会を積極的に作りだしたりするためのスキル」(高綱ら, 2014)を6つの側面から測定するものである。すなわち、興味の幅を広げたり、興味のあることを探索、探求するスキルである「興味探索スキル」、苦勞することや手間のかかることでも、それを持続するための「継続スキル」、自分の考え方や態度、自分の置かれている環境を、より適応的なもの、より望ましいものへ変化させるための「変化スキル」、結果やプロセスに対してポジティブな見通しを持つ「楽観的認識スキル」、結果や成果が不確かな場合でも、回避せずそれを始める「始動(開始)スキル」、「弱い紐帯」をできるだけ多様な他者とつなげる「人間関係スキル」という6つのスキルである。6SCで想定されている6つのスキルのうち5つはおおむねPlanned Happenstance 理論の示したスキルの概念に相当するが、「人間関係スキル」は日本独自の側面である。高木(2016)はこの機会活用スキルを、ジェネリックスキルの獲得に先行して高まるものとして学生の成長の指標とした。なお、6SCの項目評定はスキルそのものの評価というよりは「うまくやれないと思う(1点)」から「うまくやれると思う(7点)」というように、スキルに対する自信の程度を問うものである。

平成27年度春のガイダンスで入学生から得た6SCの得点を、地域連携実践演習とテーマリサーチプロジェクトの受講の有無により比較した結果からは、地域連携実践演習を受講した学生は、受講しなかった学生よりも「興味探索スキル」、「継続スキル」、「人間関係スキル」が有意に高く、また「開始スキル」は有意傾向に高いことが示された(高木, 2016)。一方、テーマリサーチプロジェクトの受講の有無による各スキル得点の差は有意ではなかった。学生が時間と労力を費やし、地域の活動に参画する地域連携実践演習に対して、テーマリサーチプロジェクトは学内での集中講義であるため、時間や労力の面でのコストは比較的低い。そのため地域連携実践演習の受講者のみで示された6SC得点の高さは、コストを伴っても経験してみようという積極性の高さであったといえよう。これは6SCで測定される機会活用スキルの「キャリア形成につながる可能性を高める」という役割と一致した結果といえる。

2. 本研究の目的

前述のとおり、高木(2016)では地域連携実践演習の受講者が、多少のコストを伴っても経験に対して積極的であることが示唆された。「キャリア形成に繋がるかもしれない機会を認識し、積極的に作り出す」という機会活用スキルの特性上、これらのスキルが地域連携実践演習へのエントリーという行動に影響していることは妥当な結果であろう。だが、経験は成長のチャンスに成り得る一方で、経験だけに終わり、学びや成長には至らない可能性もある。そこで本研究は、学生の成長を客観的にとらえ、実践演習科目の受講による変化を検証することを目的とした。

まず、高木(2016)の調査対象であった新入生が2年生に進級した春に追跡調査を実施し、前年度からの6SC得点の変化と学生自身の成長の自覚を従属変数として、実践演習科目の受講状況との関係を検討する。実践演習科目が学生の成長に影響しているのであれば、受講の有無により学生自身による成長の自覚や6SC得点の増減が異なることが期待される。

なお、大学生の成長や変化に対しては、特定の授業のような単一の要因が顕著な影響力をもつことは考えにくい。授業以外にも、一人暮らしやアルバイト、サークル等での仲間関係など大学生の生活には多くの経験が存在する。そこで縦断調査の第2回目では、実践演習科目の履修以外の授業や学校内外の経験などから学生が自身の変化に影響したと認知している要因が、6SCの得点変化量にどのようにかかわるかも検討する。

ところで、ある活動への参加が学生の成長に寄与としても、そこに影響するのは単に科目を受講するという行為でなく、何を求めてどのように取り組んだか、という受講の動機づけや経験の質であることが予想される。そこで地域連携実践演習の受講者についてはさらに、事後指導において科目エントリーの理由や経験の振り返りに関する調査を実施し、受講学生による教育効果と影響因の報告と機会活用スキルの変化との関係を検討した。

3. 方法

1) 学年対象の縦断調査

初回調査は、平成27年度4月に新入生ガイダンスで実施した高木(2016)の調査である。今後の調査結果とのデータマッチングの為の学籍番号と、キャリア獲得のための機会活用スキル尺度(6SC)とから成る質問紙調査を実施した。

第2回調査は、初回調査から1年後、対象学年が2年生になった平成28年度4月の2年生対象ガイダンスで前年同様の手続きにより実施された。質問紙の内容は、データマッチングのための学籍番号と6SCに加えて、学生自身の成長の自覚に関する以下の内容を含めた。

a. 成長の自覚:「大学に入学した一年前と比べて、現在のあなたは成長したと思いますか?」という問いに対して「成長した部分がある」「少し成長した部分がある」「全く成長していない/成長した部分が思いつかない(停滞している)」からひとつ選択するよう求め、どのような点が成長した、またはしなかったのか自由記述を得た。

b. 成長/停滞の影響要因について: a. で選択された成長や停滞の自覚に影響を及ぼした要因として、「授業」「アル

バイト」「人間関係」など10項目に「その他」を加えた11項目について、考えられるもの全てに○をつけるよう求め、それらが具体的にどのように影響を与えたか記述を得た。

2) 地域連携実践演習履修者のみの調査

地域連携実践演習の受講者については、科目へのエントリーの理由や活動による学生の変化を検討する為に、地域連携実践演習の事後指導でさらに調査を実施した。調査内容は、データマッチングの為に学籍番号と以下の項目であった。

a. 地域連携実践演習のエントリー理由 地域連携実践演習にエントリーした理由について「活動内容に興味・関心を持ったから」など8項目を提示し、「全くあてはまらない(1)」から「たいへん当てはまる(5)」の5段階で評定を得た。

b. 地域連携実践演習の活動振り返り 地域連携実践演習の活動の振り返りと自発的活動への意識について「自分の性格や能力、適性など自分自身についての気づきがあった」「今後、テーマリサーチプロジェクトを履修したい」「自分で計画を企画・運営してみたい」など12項目について「全くあてはまらない(1)」から「たいへん当てはまる(5)」の5段階で評定を得た。

平成27年度前期の地域連携実践演習の事後指導はその年の10月に行われ、35名のデータを得た。後期分の事後指導は平成28年度の4月に行われ、73名のデータを得た。うち2名は前期後期ともに参加していたが、今回は後期分のデータのみを用いて108名を分析対象とした。

4. 結果

1) 尺度得点の算出

機会活用スキル(6SC) 回収された全データについて、高綱ら(2014)を踏襲し6つのスキルの平均値、標準偏差、および α 係数を算出した(Table1)。信頼性係数である

α 係数は.80～.86の値を示し、高綱ら(2014)、高木(2016)と同様に、いずれのスキル項目も尺度の内的整合性は高いと判断した。今回回収された質問紙は237名(全2年生の66.0%)、このうち記入上の不備があったものを除き、前年と本年の縦断データが揃ったもの218名(全2年生の60.7%)を以後の分析対象とした。

次に、6SCの各得点について2年次の得点から1年次の得点を引いた得点変化量を算出した。前年からスキルが高まっていれば得点変化量は正の、低下していれば負の値を取る。全てのスキルの得点変化量が負の値を示しており、全体的に機会活用スキルについての自信が1年前よりも低下していることがうかがえる(Table2)。

成長の自覚 成長の自覚の報告は、分析対象者218名中「成長した部分がある」64名(29.4%)、「少し成長した部分がある」118名(54.1%)、「全く成長していない／思いつかない」27名(12.4%)、欠損値が9名(4.1%)であり、「成長した部分がある」と「少し成長した部分がある」をあわせると、全体の80%以上が入学時から的一年間で自身の成長を自覚していた。

成長/停滞の影響要因 成長・停滞の影響要因について、提示した項目から「あてはまる」ものを全て選択するよう求めた。結果をFigure1に示す。最も多く選択された項目は「アルバイト」であり、大学で提供できる経験とは言い難いものであったが、それ以降は「授業(実践演習含む)」、「人間関係」、「一人暮らしや通学などの生活面」「サークル活動」と続き、大学生活と関係がみられる項目も成長の影響要因として挙げられていた。

2) 1年次の実践演習受講と6SC得点および得点変化量の関係

実践演習エントリーとの関係 縦断データが揃った218名について、地域連携実践演習およびテーマリサーチプロジェクトの履修状況の内訳をクロス集計表で示す(Table3)。Fisherの直接法により、地域連携実践演習

Table1 第2回調査の6SCの各尺度の得点分布と信頼性係数

尺度名	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	α
興味探索スキル	237	4.60	0.97	.80
継続スキル	237	4.50	1.04	.85
変化スキル	237	4.52	0.92	.86
楽観的認識スキル	237	4.58	1.03	.86
開始スキル	237	4.74	0.97	.83
人間関係スキル	237	3.90	1.21	.83

注)項目数で除した値。

Table2 6SCの各尺度の変化量得点の平均と標準偏差

尺度名	<i>n</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
興味探索スキル	218	-4.00	2.60	-.16	.96
継続スキル	217	-3.00	3.00	-.11	.93
変化スキル	216	-3.40	2.00	-.05	.87
楽観的認識スキル	217	-4.20	3.60	-.08	1.09
開始スキル	214	-3.80	3.40	-.04	1.05
人間関係スキル	215	-5.40	3.60	-.24	1.16

※正＝得点増加、負＝得点減少

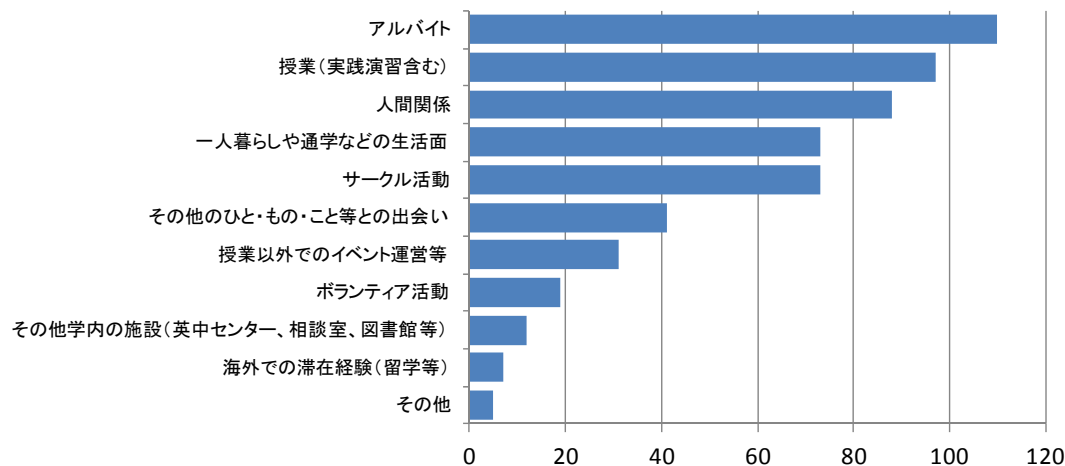


Figure1 自身の成長の影響要因（複数選択）

Table3 地域連携実践演習のエントリーとテーマリサーチプロジェクトの履修のクロス表

		テーマリサーチ プロジェクト履修		合計
		あり	なし	
地域連携実践演 習エントリー	あり	0	77	77
	なし	139	2	141
合計		139	79	218

Table4 地域連携実践演習のエントリー状況と6SCの2015年度、2016年度の平均得点、変化量

			2015年4月		2016年4月		得点変化量	
	エントリー	N	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
F1興味探索スキル	あり	77	4.94	.889	4.75	.962	-.19	.938
	なし	141	4.65	.955	4.50	.975	-.15	.980
F2継続スキル	あり	77	4.68	.906	4.58	.973	-.10	.766
	なし	141	4.54	1.117	4.43	1.080	-.12	1.005
F3変化スキル	あり	77	4.51	.704	4.49	.827	-.02	.876
	なし	140	4.54	.941	4.49	.969	-.06	.874
F4楽観的認識スキル	あり	77	4.67	1.040	4.62	.978	-.06	1.010
	なし	141	4.62	1.084	4.53	1.081	-.09	1.128
F5開始スキル	あり	76	4.86	1.052	4.86	.972	-.04	.957
	なし	140	4.68	1.059	4.64	.991	-.04	1.106
F6人間関係スキル	あり	76	4.47	1.066	4.03	1.156	-.46	1.147
	なし	141	3.93	1.262	3.80	1.227	-.12	1.159

とテーマリサーチ・プロジェクトのどちらか一方のみを受講した学生が多いことが示された ($p = .000$)。

分析対象者のうち、1年次に地域連携実践演習にエントリーした学生77名と、しなかった学生141名の前年度および本年度の各スキル得点、1年間の得点の増減を示す得

点変化量の平均値と標準偏差をTable4およびFigure2に、テーマリサーチプロジェクト履修状況についても、1年次の履修学生139名と履修しなかった80名について同様の平均値と標準偏差をTable5およびFigure3に示す。

実践演習の受講状況による機会活用スキルの変化につい

て検討するため、1年次の地域連携実践演習のエントリー状況(2)×テーマリサーチプロジェクトの履修状況(2)で2年次春の6SCの各得点について分散分析を実施した。結果、「継続スキル」と「人間関係スキル」で有意な交互作用が示され、(順に $F(3,1)=7.03, p<.05, F(3,1)=6.72, p<.05$)、「開始スキル」は交互作用が有意傾向であった($F(3,1)=3.85, p<.10$)。地域連携実践演習を受講していた学生は、2年次でこれらのスキル得点が高

いことが示唆される結果であった。

次に、6SCの各スキルの得点変化量についても、1年次の地域連携実践演習のエントリー状況(2)×テーマリサーチプロジェクトの履修状況(2)の2要因分散分析を実施した。結果、「人間関係スキル」でのみ地域連携実践演習のエントリーの主効果がみとめられ($F(3,1)=7.46, p=.01$)、地域連携実践演習の履修者は「人間関係スキル」得点が大きく低下していることが示された。

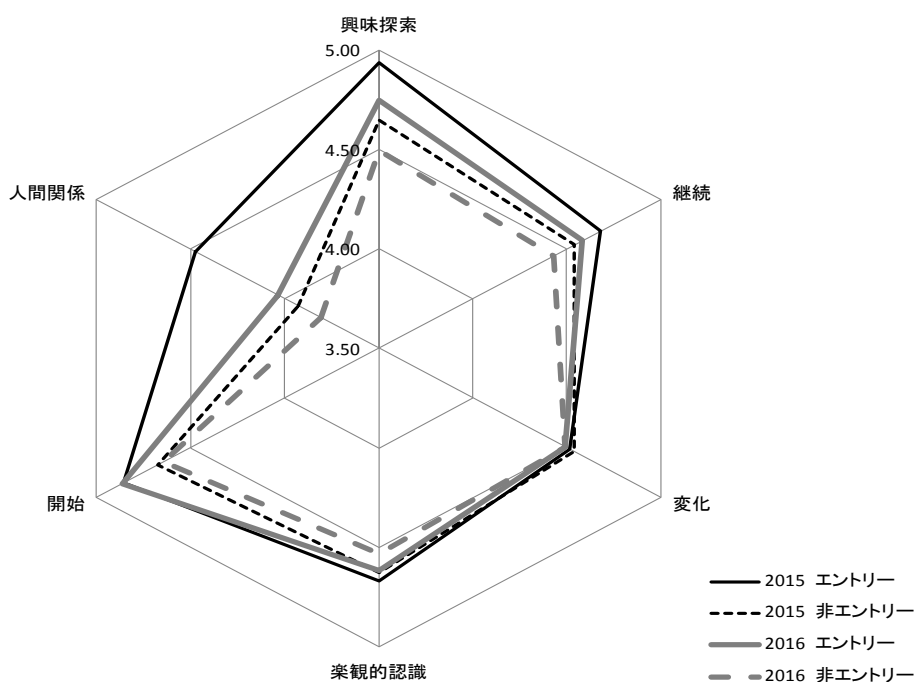


Figure2 地域連携実践演習エントリー状況と2015年度・2016年度の6SC平均得点

Table5 テーマリサーチプロジェクト履修状況と6SCの2015年度、2016年度の平均得点、変化量

			2015年4月		2016年4月		得点変化量	
	エントリー	N	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
F1興味探索スキル	あり	79	4.62	.960	4.53	1.008	-.10	1.002
	なし	138	4.82	.925	4.62	.958	-.20	.942
F2継続スキル	あり	79	4.60	1.165	4.58	1.074	-.02	1.105
	なし	138	4.59	.977	4.43	1.025	-.17	.802
F3変化スキル	あり	79	4.52	.907	4.52	.955	-.02	.816
	なし	137	4.54	.839	4.47	.901	-.06	.907
F4楽観的認識スキル	あり	79	4.69	1.097	4.59	1.076	-.10	1.114
	なし	138	4.61	1.052	4.55	1.029	-.07	1.073
F5開始スキル	あり	79	4.67	1.090	4.72	.982	.05	.983
	なし	136	4.78	1.040	4.72	.995	-.09	1.094
F6人間関係スキル	あり	79	4.07	1.185	3.89	1.260	-.17	1.190
	なし	137	4.15	1.247	3.88	1.176	-.28	1.150

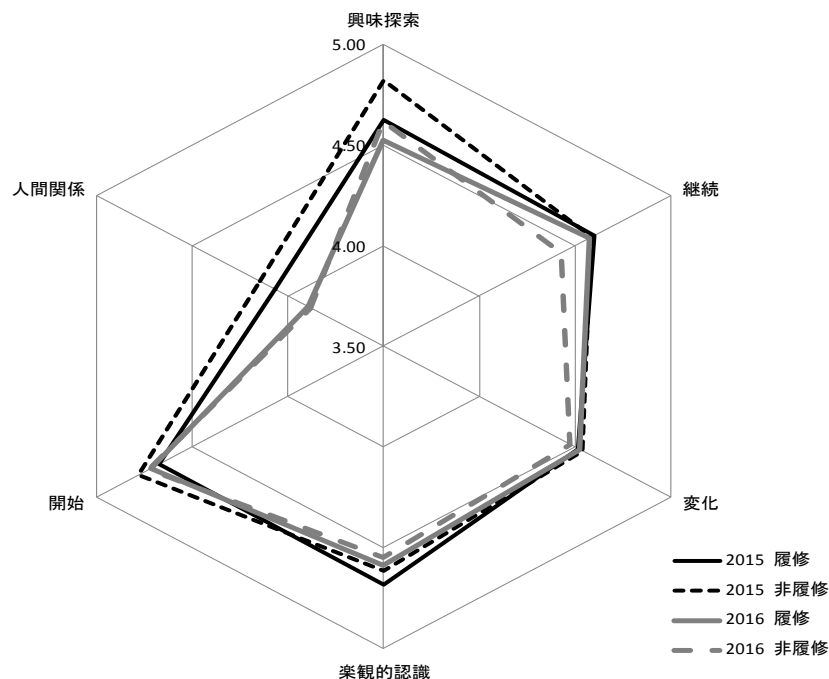


Figure3 テーマリサーチプロジェクトの履修状況と2015年度・2016年度の6SCの平均得点

以上で示されたように、1年次で地域連携実践演習を受講した学生の2年次春の「継続スキル」と「人間関係スキル」は、受講しなかった学生よりも高得点であったが、得点変化量に注目すると、スキル得点は全体的に低下しており、地域連携実践演習の受講者は人間関係スキルの自信を失ってはいるが、それでも履修しなかった学生よりは高得点であることが示された。

3) 成長の自覚と6SC得点変化量

学生に選択を求めた成長の自覚、「成長した部分がある」「少し成長した部分がある」「全く成長していない/思いつかない」の3群間で、6SCの各スキル得点の変化量を一元配置分散分析により比較した。結果は「楽観的認識スキル」、「開始スキル」、「人間関係スキル」で群間の差が有意であり（順に $F(2,205)=5.64, p<.01$ 、 $F(2,202)=3.14, p<.05$ 、 $F(2,203)=3.26, p<.05$ ）、「変化スキル」は有意傾向であった（ $F(2,204)=3.02, p<.10$ ）。Tukey法による多重比較の結果、「楽観的認識スキル」は「全く成長していない/思いつかない」群よりも「成長した部分がある」群が有意に得点が増加しており（ $p<.001$ ）、「少し成長した部分がある」よりも「成長した部分がある」群が有意傾向で得点が増加していた。また「人間関係スキル」では「全く成長していない/思いつかない」群よりも「成長した部分がある」群が有意に（ $p<.05$ ）、「開始スキル」は「少し成長した部分がある」よりも「成長した部分がある」群が有意傾向に得点が増加していた。したがって、大学生から報告された成長の自覚は、一部の機会活用スキルの自信が高まったことを反映していると考えられる。

4) 成長／停滞の影響要因と6SC得点変化量の関係

6SCの各得点変化量を目的変数に、成長の影響要因とふたつの実践演習科目の受講の有無を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した結果、「楽観的認識」を除く5つのスキルについて有意な標準偏回帰係数が示された。結果をTable6に示す。複数の機会活用スキルの得点増加との関係が認められたのはサークル活動の経験であり、「興味探索」「継続」「変化」「開始」「人間関係」の各スキルの増加量に全て正の影響を示していた（順に $\beta=.18, .17, .22, .15, .16$ ）。その他は「継続」スキルの増加に学内施設の経験から正の（ $\beta=.18$ ）、人間関係から負の影響（ $\beta=-.18$ ）が示され、「変化」スキルの増加に授業以外の大学でのイベント運営等から負の（ $\beta=-.16$ ）、「人間関係」スキルに1年次の地域連携実践演習のエントリーから負（ $\beta=-.16$ ）の影響が示された。全体的には、学生の機会活用スキルの向上にはサークル活動の経験が有効に作用し、授業内外での実践的活動の経験や人間関係が一部のスキル得点の低下に作用したことがここでも示された。

5) 地域連携実践演習 自己指導での調査による検討

エントリー理由とスキル得点変化量 地域連携実践演習のエントリー理由の平均評定値（Figure4）と、縦断調査で得られた6SCの各得点変化量との相関（Table7）を示す。

エントリー理由は、「活動内容への興味・関心（平均4.48点）」、「成長できると思ったから（4.05点）」、「何かにチャレンジしてみようと思ったから（4.04点）」、といった活動に対する積極性がうかがえる項目の評定が高い一方で、「単位になるから（4.29）」という消極的な理由も高い平均評定値を示した。

得点変化量との相関（Table7）からは、「何かにチャ

Table6 学生の成長要因と機会活用スキル得点変化量との関係

説明変数	目的変数(機会活用スキルの得点変化量)				
	興味探索	継続	変化	開始	人間関係
授業(実践演習含む)					
授業以外の大学でのイベント運営等			-.16 *		
その他学内の施設(英中センター、相談室、図書館等)		.18 **			
サークル活動	.18 **	.17 *	.22 **	.15 *	.16 *
ボランティア活動					
海外での滞在経験(留学等)					
アルバイト					
一人暮らしや通学などの生活面					
人間関係		-.18 **			
その他のひと・もの・こと等との出会い					
そのほか					
1年次地域連携実践演習エントリー					-.16 *
1年次テーマリサーチプロジェクト履修					
調整済R2	.03	.06	.05	.02	.04 *
F値	7.33 *	5.74 **	6.65 **	4.82 *	5.13 **

(**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10)

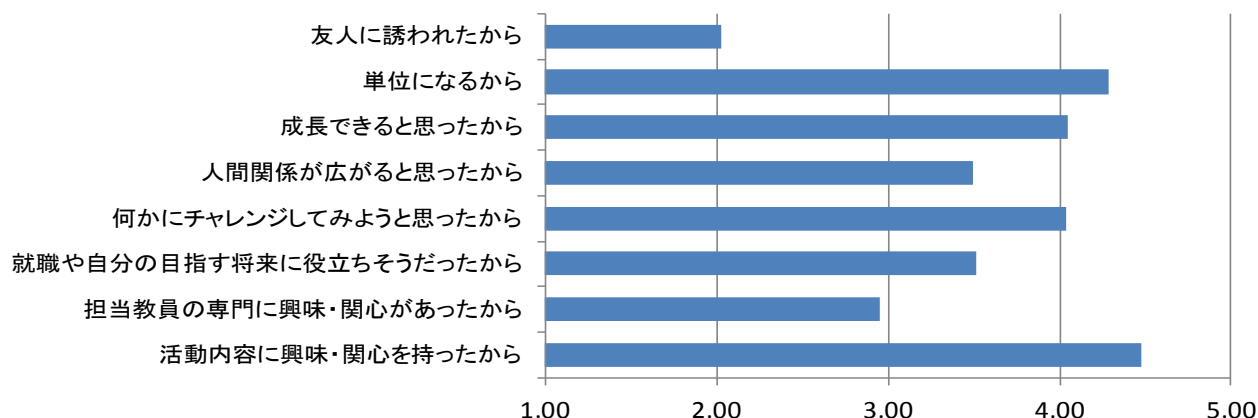


Figure4 地域連携実践演習のエントリー理由

Table7 地域連携実践演習エントリー理由と6SC得点変化量との相関

エントリー理由	n	Mean	SD	6SCの変化量得点との相関(n=75)					
				興味探索	継続	変化	楽観的認識	開始	人間関係
活動内容に興味・関心を持ったから	108	4.48	0.84	-.114	.075	.018	.149	.155	.060
担当教員の専門に興味・関心があったから	108	2.95	1.27	.085	.177	.074	.092	.148	.012
就職や自分の目指す将来に役立ちそうだったから	107	3.51	1.15	.050	.161	.056	.073	.076	.077
何かにチャレンジしてみようと思ったから	108	4.04	0.98	.203 †	.172	.395 **	.247 *	.216 †	.101
人間関係が広がると思ったから	108	3.49	1.14	.015	.045	.201 †	.016	-.032	-.119
成長できると思ったから	108	4.05	0.89	-.037	.111	.106	-.001	.014	.010
単位になるから	108	4.29	0.89	.097	.036	.130	.122	.131	-.043
友人に誘われたから	108	2.03	1.31	-.241 *	-.198 †	-.268 *	-.009	-.131	-.256 *

(**:p<.01,*:p<.05,†:p<.10)

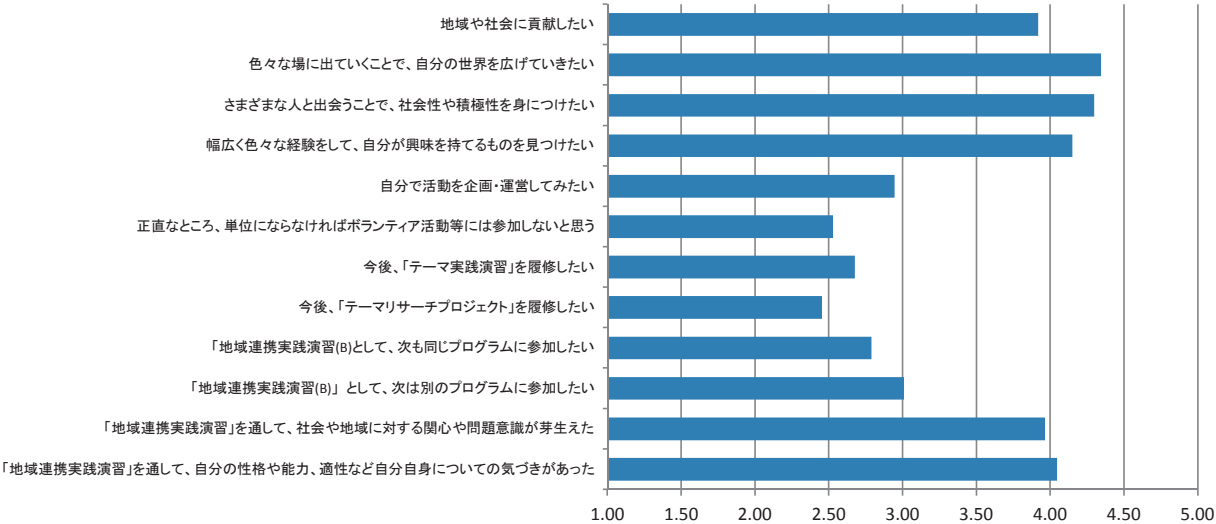


Figure5 地域連携実践演習受講後の振り返り

Table8 地域連携実践演習を終えての評価と6SC得点変化量との相関

ふりかえり	n	Mean	SD	6SCの変化量得点との相関 (n=75)					
				興味探索	継続	変化	楽観的認識	開始	人間関係
「地域連携実践演習」を通して、自分の性格や能力、適性など自分自身についての気づきがあった	108	4.05	0.73	-.259 *	-.204 †	-.128	-.118	-.178	-.229 *
「地域連携実践演習」を通して、社会や地域に対する関心や問題意識が芽生えた	108	3.96	0.91	.033	.042	.097	.172	.179	.056
「地域連携実践演習(B)」として、次は別のプログラムに参加したい	107	3.01	1.14	.031	.164	-.003	.217 †	.196 †	.075
「地域連携実践演習(B)として、次も同じプログラムに参加したい	108	2.79	1.22	-.135	-.118	-.060	-.050	-.159	-.062
今後、「テーマリサーチプロジェクト」を履修したい	108	2.45	1.09	-.036	.086	.008	.097	-.090	.062
今後、「テーマ実践演習」を履修したい	108	2.68	1.12	-.168	-.112	-.068	-.127	-.235 *	-.116
正直なところ、単位にならなければボランティア活動等には参加しないと思う	108	2.53	1.09	.192	.246 *	.284 *	.294 *	.172	.217 †
自分で活動を企画・運営してみたい	108	2.94	1.10	-.090	-.236 *	-.098	-.162	-.219 †	-.209 †
幅広く色々な経験をして、自分が興味を持てるものを見つめたい	108	4.15	0.80	-.049	-.080	.000	-.065	-.003	-.088
さまざまな人と出会うことで、社会性や積極性を身につけたい	108	4.30	0.71	-.077	.026	-.004	.019	.010	-.115
色んな場に出ていくことで、自分の世界を広げていきたい	108	4.34	0.74	.070	.038	.078	.094	.189	-.032
地域や社会に貢献したい	108	3.92	0.90	-.072	-.074	-.090	-.132	.008	-.193 †

(*: $p<.05$,†: $p<.10$)

レンジしてみようと思ったから」という理由への評定とスキル得点との間に全体的に正の相関が示されており（変化スキル: $r = .395$, $p < .05$ 、楽観的認識スキル: $r = .247$, $p < .05$ など）、挑戦する気持ちで地域連携実践演習を履修した学生のスキル得点が高まることが示されている。対して「友人に誘われたから」という項目の評定はスキルの変化量と全体的に負の相関を示しており（興味探索スキル: $r = -.241$, $p < .05$ 、変化スキル: $r = -.268$, $p < .05$ 、人間関係スキル: $r = -.256$, $p < .05$ ）、友人に誘われて地域連携実践演習にエントリーした学生のスキル得点は1年後に低下するとの結果であった。

受講後のふりかえりとスキル得点変化量 活動の振り返り項目の平均評定値（Figure5）と、縦断調査で得られた6SCの各得点変化量との相関（Table8）を示す。ふりかえりの中で高得点であった項目は、「色んな場に出て行くことで、自分の世界を広げて行きたい（平均4.34点）」、「さまざまな人と出会うことで、社会性や積極性を見につ

けたい（4.30点）」、「幅広く色々な経験をして、自分が興味を持てるものを見つめたい（4.15点）」といったその後の社会参加や経験への高い動機づけを示すものであったが、これらは受講前から高かったスキルが反映された可能性もある。一方、「『地域連携実践演習』を通して、自分の性格や能力、適性など自分自身についての気づきがあった（平均4.05点）」という経験の効果が高い得点を示しており、経験を通して自分について客観的に考える機会を得たことがうかがえる。

機会活用スキルの得点変化量との相関からは、「地域連携実践演習を通して、自分の性格や能力、適性など自分自身についての気づきがあった」という項目が複数のスキル得点変化量と負の相関を示していた（興味探索スキル: $r = -.256$, $p < .05$ 、人間関係スキル: $r = -.229$, $p < .05$ など）。この結果は、活動を通して気づいた自分自身の側面が、ポジティブなものよりは、弱点や課題などであったことが示唆されていると考えられる。

「正直なところ、単位にならなければボランティア活動等には参加しないと思う」という項目が全体的にスキル得点変化量と正の相関を示していた(継続スキル: $r = .246$, $p < .05$ 、変化スキル: $r = .284$, $p < .05$ 、楽観的認識スキル: $r = .294$, $p < .05$ など)。最初のきっかけは単位を揃える為であっても、活動に参画することでスキルが高まったという結果は興味深い。

5. 考察・今後の研究計画

実践演習の教育効果

本研究の第一の目的は、実践演習科目が学生の成長に及ぼす影響を検証することであった。指標としてキャリア構築の機会活用スキルの測定尺度、6SC (6 skills for career) の変化量、学生自身からの成長の自覚の報告、地域連携実践演習についてはさらに、経験の振り返りや将来の活動への意識などを指標として受講の有無による比較を行った。

縦断調査による学生の機会活用スキルの変化と実践演習の履修状況との関係からは、全体的にスキル得点が低下しているなかで、地域連携実践演習受講者の「人間関係スキル」得点の低下が特徴的であった。また、重回帰分析の結果からは、学生自身が自分の変化への影響因として挙げた人間関係の要因が「継続スキル」の得点変化量に負の影響を及ぼしていたほか、授業以外の大学でのイベント運営等から「変化スキル」に負の、地域連携実践演習のエントリーから「人間関係スキル」に負の影響を示していた。さらに、地域連携実践演習の事後授業で実施した調査の結果からは、活動を振り返り「自分の性格や能力、適性など自身についての気づきがあった」という項目が全体的に高い評定値を得ており、かつ機会活用スキルの複数の得点変化量と負の相関が示されていた。

以上の結果から、学生は実践演習やそれ以外で学外の活動やイベントなどに積極的にかかわるほど、自身の至らなさを感じ機会活用スキルの自信が低下していると考えられる。特に「人間関係スキル」は地域連携実践演習の受講学生の得点低下が顕著であり、高校時代は同世代や学校内での人間関係が多かった学生たちが、社会の多様な世代の方たちとともに活動するなかでさまざまな失敗をしていることがうかがえる。「外」の世界に出たり自発的に企画を運営したりといった積極的活動の経験により、学生は大学内だけで受け身の生活をしては気づけない、社会で必要な能力について考えるチャンスを得ているのかもしれない。そうであるならば、地域連携実践演習は学生達に社会の厳しさを教え一度自信を失わせる機会を提供しているといえよう。

学生が自身のスキルはまだ社会で通用しないと思い知ることは、この先の学びや成長に繋がることが期待される。本調査では自らのスキルに自信を失っていた学生たちが、この先どのように変化していくかさらに追跡調査を行い、大学での学びと学生の成長について長期的視点からの検討を行う余地があろう。また、本報告では学生の成長に関する自由記述の分析は扱わなかったが、学生が自覚している成長の側面や、地域連携実践演習での体験から得た自身についての気づきの内容、またそのきっかけとなった経験の性質などについては、記述の分析や聞き取り調査によ

る質的検討から事例を積み重ねてゆきたい。

履修理由・動機づけの影響

地域連携実践演習の履修者については、エントリーの動機と成長との関係も示された。具体的には、意欲的にチャレンジする気持ちを持ってエントリーした学生はスキル得点が増加し、友人に誘われて参加した学生はスキル得点が減少していた。

その一方で、「単位にならなければボランティア活動には参加しないと思う」と答えた学生で複数のスキル得点が増加していた。実践演習科目は、学生に社会と触れる機会を与え、ジェネリックスキルを育てるきっかけを提供することを目的とした科目である。したがって最初は単位の為に活動に参加した学生であっても、結果としてスキル得点が増加したのならば、実践演習科目群の目的を果たしているといえる。

活動に対する学生の動機づけをコントロールすることは困難ではあるが、友人へのつきあいのように消極的な理由で地域連携実践演習にエントリーした学生を、いかに巻き込み積極的に参加させるかは本科目の課題のひとつである。また、単位のために参加した学生がどのような経験を経て成長に至るのか、影響要因は何か、などについても掘り下げた検討が期待される。

他の実践演習科目の教育効果について

本報告では、実践演習科目群のうち地域連携実践演習の効果のみが示され、この科目が学生に社会の厳しさを教え、スキルに対する自信を失わせている一方で、積極的な動機をもち参加した学生の成長には繋がっていること、さらに、単位のために参加した学生の成長にも繋がる側面があることが示された。

テーマリサーチプロジェクトの教育効果としては特筆すべき結果は認められなかったが、これはテーマリサーチプロジェクトの履修が地域連携実践演習への参加と比して時間や労力のコストが低いため、さまざまな動機づけの学生が含まれていたことに起因するかもしれない。チャレンジ精神を持ち積極的な動機でテーマリサーチプロジェクトに参加した学生に焦点をあてると、成長への影響が示される可能性はある。グループワークにより企画の過程を体験するテーマリサーチプロジェクトについては、既存のプログラムに参加する地域連携実践演習とは異なる側面の教育効果が示されるで可能性も含め、引き続き検討する。

また、実践演習科目群の3つめとして、2年次から履修可能になる「テーマ実践演習」が2016年度から開講されている。実践演習科目のそれぞれの効果を明らかにし、学生のジェネリックスキル向上に資する効果的な授業運営のために、今後も継続して調査を進めたい。

引用文献

- Mitchell, K. E., Levin, A. S., & Krumboltz, J. D. (1999) Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities. *Journal of Counseling and Development*, 77, 115-124.
- 高木 邦子 (2016) 「実践演習」の効果の検討に向けて：履修学生のキャリア構築スキルの特徴 静岡文化芸術大学研究紀要, 16, 93-100.
- 高綱 睦美・浦上 昌則・杉本 英晴・矢崎 裕美子 (2014) Planned Happenstance理論を背景とした機会活用スキルの測定 ―6SC尺度作成の試み― 日本キャリア教育学会第36回研究大会発表論文集, 45-46.

